

2019年度 プロジェクト研究所業績報告書（中間報告）

プロジェクト名	分野横断によるセルフアセスメントツールの開発研究
研 究 所 名	実践女子大学セルフアセスメントツール研究所 (所長 日本語コミュニケーション学科 大塚みさ 教授)
設 置 開 始	2018. 4. 1
設 置 終 了	2021. 3. 31

■研究の進捗状況（研究員の活動実績含む）

《前期》

- ・ 担当科目においてルーブリック調査（事前・事後）を実施した。（全教員研究員）
 - ・ 汎用ルーブリックの一例として、「実践入門セミナー」について、食生活科学科、短期大学部英コミ、日コミで共通フォームを作成し、それをういてルーブリック調査を実施した。（松島、白尾、三田、大塚）
 - ・ SPOD フォーラム 2019 ポスターセッションへの参加応募を行うため、サイボウズを使って発表内容を審議した。（全教員研究員）
 - ・ 1年半の成果を欧州教育学会で発表した。（大塚、三田）
 - ・ 2019年世界教育学会（WERA）東京大会に3名の研究員が参加し、本研究所の研究計画に関わる発表を聞き、情報交換を行った。（清田、三田、大塚）
 - ・ SPOD フォーラム 2019 ポスターセッション（愛媛大学）においてポスター発表を行い、「優秀ポスター賞」を受賞した。（発表担当：大塚、三田）
- 審査員から伝えられたコメントの抜粋は以下の通り。
- ・ 授業評価の新しい取り組みである。
 - ・ ルーブリックの先進的な取り組みである。
 - ・ 評価の意義がわかりやすく、質保証の方法として参考になった。
- ・ 前期分のルーブリック調査の集計結果を基に分析を実施した。（全教員研究員）

《後期》

- ・ 担当科目においてルーブリック調査（事前・事後）を実施した。（全教員研究員）
- ・ 短期大学部課外活動2種において、課題ルーブリック調査を実施した。（大塚、三田）
- ・ Asia Conference on Education（東京）においてポスター発表を行った。（大塚）
- ・ Conference for Higher Education Research（香港）においてポスター発表を行った。（発表担当：大塚、三田）
- ・ 電子化ルーブリック（アプリ）の代替物としての学生用「個別報告書」（仮称 Personal Date Report）について、業者と相談し開発依頼、試作版の検討を重ねて完成。3名の教員研究員が担当する3科目における後期事前調査分について作成したpdf納品。一部の研究員はmanabaレポート機能を使ってフィードバックとともに学生に送付した。（大塚、三田、深澤）
- ・ Hawaii International Conference on Education（米国Hawaii）においてポスター発表を行っ

た。(発表担当：白尾、三田)

- ・ 3科目について「個別報告書」作成、学生にフィードバック。(大塚、三田、深澤)
- ・ Southeast Asia Conference on Education (シンガポール)において口頭発表を行った。(発表担当：大塚、三田)
- ・ National University of Singapore、College of Alice & Peter Tanを訪問し、学習評価の方法やルーブリックの導入について情報共有を行った。(大塚、三田)
- ・ 全教員研究員による分析と振り返り、および研究所の研究業績をまとめた『2019年度活動報告書』を作成、印刷・製本した
- ・ 2020年6月開催予定の大学教育学会において、自由研究発表に応募し、採択された。(大塚、三田) ※新型コロナウイルス感染拡大の状況に鑑み、オンライン開催もしくは要旨集への掲載を以て発表とみなされる可能性がある。

■現在までの達成度

研究所設置申請書記載の計画についての進捗と達成度を以下にまとめる。(2018年度末達成済みの内容は、詳細を割愛する)

①最も有効なセルスアセスメントツールの選定と検証 (2018年4月着手、2019年3月到達予定)

→2019年3月達成度自己評価 100% (前年度達成済)

②科目ルーブリックの開発と精度向上

(2018年4月着手、2021年3月到達予定)

→年度達成度自己評価 100%、全期間達成度自己評価 8%

- ・ 実施を重ねてルーブリックの制度は飛躍的に向上した。残りの1年でさらにチューニングに注力して改良を加える必要がある。

③汎用ルーブリックの作成と改良

(2019年3月着手、2021年3月到達予定)

→年度達成度自己評価 90%、全期間達成度自己評価 8%

- ・ 学科特性をふまえた改良を加える必要がある。

④ルーブリックの体裁や授業への導入方法、学生からのアクセシビリティの検討

(2018年9月着手、2021年3月到達予定)

→年度達成度自己評価 90%、全期間達成度自己評価 80%

- ・ 検討を重ね、向上させることができた。

⑤携帯端末で操作できるルーブリックアプリを開発する。

④と並行して検討し、試作と改良を重ねる。

(2018年9月着手、2021年3月到達予定)

→年度達成度自己評価 60%、3年間 50%

・業者への相談を重ねて模索を続けたが、アプリとしての開発はセキュリティ面並びにコスト面での困難が大きいことが明らかとなった。代わりに「個別報告書」（仮称 Personal Date Report）を作成し、manaba で個別配布をすることでその代替とする試みを行ったが、大変好評であった。当初の予定とは異なるが、その役割を十分担えるものとして評価できると考えている。

⑥課題ルーブリックの開発と精度向上

（2018年9月着手、2021年3月到達予定）

→年度達成度自己評価 90%、3年間 80%・前年度の結果を生かして調査票を改善したこと、イベント直後に調査を行ったことなどにより、精度の高い調査を実施できた。

■次年度以降の研究（見込み）

科目ルーブリックの開発と精度向上（継続）

ルーブリック調査票の改良と調査の実施、結果の集計・分析を行う。

汎用ルーブリックの作成と改良

大学・短期大学部における共通教育科目「実践入門セミナー」の統一ルーブリックを試作し、複数の学科で導入する。

ルーブリックの体裁や授業への導入方法、学生からのアクセシビリティの検討

特に「学生からのアクセシビリティ」の検討を行う。

携帯端末で操作できるルーブリックアプリ開発の可能性追究

両者をまとめて、「個別報告書」（仮称 Personal Date Report）のクラス授業、ゼミなどに導入し、より効果的な実施方法を探究する。

課題ルーブリックの開発と精度向上

導入する活動を増やし、ヒアリングを重ねて精度向上を目指す。

学会等における研究成果の発表と、国内外でのネットワーク構築

2019年度に引き続き、教育系の学会、各研究員所属の専門分野における学会等での発表を行い、有益な意見を得る。また先進機関とのネットワーク構築を進め、情報収集を行う。

■研究活動における成果

(1) 研究成果（雑誌、学会発表、図書等）

学会発表

Otsuka, M and Mita, K. The Use of Rubrics for Self-assessment as an Effective Tool for Autonomous Education in College. The European Conference on Education. London. 2019.7

大塚みさ、三田薫、清田夏代「自己評価ルーブリックの異分野共同開発の試み」SPOD（四国地区大学教職員能力開発ネットワーク）フォーラムポスターセッション、愛媛大学、2019.8（優秀ポスター

賞受賞)

Otsuka, M. The Potential of Rubrics as Tools for Self-assessment: The Potential of Rubrics as Tools for Self-assessment. Asia Conference on Education. Tokyo. 2019.11

Otsuka, M., Mita, K., Shirao, M., and Matsushima, T. What Can Work against the Uncertain Future the Attempt of Collaborative Exploitation using Self-assessment Rubrics. Conference for Higher Education Research. Hong Kong, 2019.11

Shirao, M., Mita, K., Matsushima, T., Fukazawa, A., Seida, N. and Otsuka, M. Development and Application of a Rubric as an Effective Self-assessment Tool: Design by Subject Characteristics. Hawaii International Conference on Education. Hawaii 2020.1

Otsuka, M and Mita, K. "Tuning" self-assessment rubrics: focusing on Japanese female students' attributes. Southeast Asia Conference on Education. Singapore 2020.2

(2) 学生・生徒の教育及び支援に関する還元

- 全教員研究員が、前期・後期の担当科目においてルーブリック調査（事前・事後）を実施した。その自由記入欄や授業アンケートから、それを通して学生たちがより有意義な学修を行えたことが確認された。
- 電子化ルーブリック（アプリ）の代替物としての学生用「個別報告書」（仮称 Personal Date Report）を業者の協力を得て開発した。試作版を3名の教員研究員が担当科目において試用した。一部の研究員はmanabaレポート機能を使ってフィードバックとともに学生に送付する試みを行い、学生たちに高い評価を得た。（大塚、三田、深澤）
- 課題ルーブリックのうち、ホリデーカードエクステンジプロジェクトの活動については参加前、1回目イベント後、2回目イベント後の3回のルーブリック自己評価調査を実施したところ、活動を通じた成長を参加者が強く感じる事ができた。（大塚、三田）